

H.P.ベルラーへの建築思想における中世と近代の関係に関する研究

213-072 高橋 ゆか

序章

研究背景

H.P.ベルラーヘ（Hendrik Petrus Berlage, 1856-1934）は、オランダ近代建築の父とも称される建築家、都市計画家である。彼が活躍した19世紀末から20世紀初頭という時代は、建築の伝統と革新の「過渡期」とも言われる時期であり、建築の近代化についての議論が盛んであった。まさにこの「過渡期」においてベルラーヘは、新たな時代の建築を追求していくことになるが、そこには、「過去／伝統」を顧みる視点が存在していた。それは、彼の代表作であるアムステルダム証券取引所（1903）に見られる様式主義的な表現とともに、彼が著した著作や論文によって示唆されている。

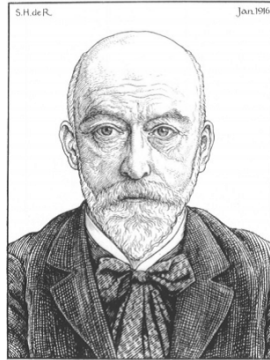


図1 ベルラーヘの肖像画

既往研究

近代建築を牽引した建築理論家S.ギーディオンは、ベルラーヘは新しい「様式」を追求するにあたって中世建築に注目していたと指摘している¹が、これまでこの点については十分に論じられてはこなかった。

これまでのベルラーヘに関する研究は、主として、ベルラーヘの建築思想、代表作であるアムステルダム証券取引所、そして彼のアムステルダム南部拡張計画に向けられてきた。本研究を進めるにあたって、ベルラーヘの建築思想を包括的に扱った宇田直史氏による研究が特に注目される²。宇田氏の論考は、これまでのベルラーヘの思想研究の問題点を指摘した上で、ベルラーヘの多様な思想には「普遍性」の理念が通底していたことを明らかにしているが、「過去」へと向けたベルラーヘの視点については論じられてはいない。

研究目的と方法

本研究は、ベルラーヘの主要な著書、論考の精読を通じて、その思想の展開において過去の建築、特に中世建築をどのように捉え、評価していたかについて着目しつつ、そのような過去への視点・評価が新しい建築の創出に如何に結びついていったかを明らかにすることを目的としている。このことによって、ベルラーヘという「過渡期」の建築家の多様な思想の一端が詳らかなものとなるだけでなく、中世と近代の接続部分の新たな側面が明らかとなり、延いては近代建築の多様性の理解を深め

る端緒となることを期待している。

本研究は、主としてベルラーヘ自身による言説を考察対象としている。[表1]に主な資料を示す。

論文の構成

ベルラーヘは生涯にわたって、時代に相応しい「様式」とは何かを追究し続けた。その思想は個人主義の否定から始まり、やがて工業化の受容へと至るが、その中で彼は中世にひとつの理想を見ていたと考えられる。この思想の変遷を辿ることで、彼が中世建築をどのように評価していたのか、そして彼が理想とした「様式」がどのように追求されていったかについて考察する。

第1章 個人主義の否定

ベルラーヘは19世紀の歴史主義的建築を批判し、「様式」不在の時代としての現状を嘆くが、「様式」が退廃することとなったきっかけとして、中世から近世にかけて個人の在り方が変化したことを挙げている。キリスト教を基本とする中世の時代においては作り手たちの間に協働関係があり、芸術は共同体に隷属するものとして存在しており、その意味で芸術は個人のものではなかった。特に建築芸術は職人たちの協働の賜物といえる総合芸術であったが、近世以降この協働関係が意味を失い、作り手個人の意味、つまり建築家の個性としての「恣意性」が芸術において際立つようになったとベルラーヘは指摘している。

第2章 「様式」の追究

ベルラーヘは、時代に相応しい「様式」の実現のためには、個人主義による「恣意性」の排除、言い換えれば「一般性」の獲得が課題であると考えていた³。その主著『建築の原理と発展（*Grundlagen und Entwicklung der Architektur*）』（1908）の中で彼は、過去の優れた建築や

表1 主たる研究資料

H.P.Berlage: "Baukunst und Kleinkunst," *Kunstgewerbeblatt* 18, 1906.

H.P.Berlage: *Normalisatie in Woningbouw*, W.L.&J.Brusse's, 1918.

P.Singelenberg: *H.P.Berlage-Idea and Style: The Quest for Modern Architecture*, Utrecht, 1972.

Sergio Polano, *Hendrik Petrus Berlage: Complete Works*, Rizzoli, 1988.

ドナルド・I・グリーンバーク:『オランダの都市と集住 多様性の中の統一』, 矢代真己訳, 住まいの図書館出版局, 1990.

I.B.Whyte and W.de Wit: *Hendrik Petrus BERLAGE: THOUGHTS ON STYLE 1886-1909*, 1995.

自然界の例を挙げ、相応しい「様式」の実現に成功しているのは、そこに恣意性が含まれないという理由からであることを指摘し、加えて、作品に作り手の意思が反映されないようにする方法として、幾何学的システムの利用が有用であるとしている。彼は古典建築や中世建築を分析していくと、黄金比やピタゴラスの三角形などの幾何学的システムが実際に用いられていることを指摘し、また自身の主張を補強するかたちで G.ゼンパーによる言説を紹介し、彼の思想に対して共感を示している。ベルラーへの思想においては、幾何学方法は建築に客観性をもたらす科学として位置付けられている。また彼は、幾何学は単なる道具でしかなく、そのシステムの利用はあくまで手法にすぎないとも述べており、幾何学の利用そのものが目的となってしまうように注意せねばならないと彼は強調していた⁴。

ドイツからイギリスに派遣された技術官僚ヘルマン・ムテジウスがイギリス近代建築の優れた特徴として用いた“sachlich”⁵という言葉が20世紀初頭、ドイツからオランダへ「輸入」されることとなる。ベルラーへは著書の中でしばしばムテジウスの発言を引用しており、さらにはドイツ語で著された論考において、建築が備えるべき特性として繰り返し“sachlich”という語を用いている。このことから、ベルラーへの思想に与えたムテジウスの影響は大きいと考えられ、ベルラーへが批判している個人性と相反するような多様な意味合いを持つ“sachlich”という語がベルラーへの理想とするものに合致するものであったことが、本研究における考察から明らかとなった。ベルラーへは、二つの優れた「様式」（ギリシアと中世）の芸術は“sachlich”な芸術であると述べ⁶、それらにおいては恣意性や個人性が排され、理想的な「様式」の実現に成功しているとして高く評価している。“sachlich”を追求することで、「恣意性」は排除され、ベルラーへが理想とした新しい「様式」が実現されると彼は考えたのであった。

第3章 工業化の受容

『建築における様式の考察 (*Gedanken über den Stil in der Baukunst*)』(1905)においてベルラーへは、大量生産による製品が溢れる状況を嘆き、それらを「偽りの芸術」として批判している。一方『住宅建設における標準化 (*Normalisatie in Woningbouw*)』(1918)では、「住宅建設は大量生産化されなければならない」と述べており、彼の言説において工業化や機械化を推し進めるような記述が明らかに増えている。同書においては、客観性をもたらすものとして住宅建設における大量生産を擁護しており⁷、「同様のモチーフを反復することは、根源的な美学的機能なのである」⁸というように、標準化・規格化されたデザインに美的秩序を見出す記述も見られる。住

宅不足の問題に対する対応が急務であった20世紀初頭のオランダでは、都市部においては人口が急増し、住宅の量的不足に加え劣悪な居住環境に対する対応が求められていた。そうした社会状況のなかで建築家は共同体に対して貢献すべきというベルラーへの使命感が、個人主義の否定から始まった彼の思想を工業化受容へと導いたと考えられる。

ベルラーへは、機械技術利用の必要性を訴え、その意味でウィリアム・モリス的な中世主義には限界があると述べている⁹。手仕事を徹底したモリスの製品は必然的に高価なものとなった結果、富裕層の手にしか渡らなかつた。住宅不足への対応が急務となった状況にあつて、建築が社会に貢献していくためには、当代の機械技術を拠り所とすることが必要であるとベルラーへは考えた。またムテジウスは、新たな造形原理を開拓したという点においてアーツ・アンド・クラフツ運動の革新性に対し一定の評価を示していた一方で、労働者層や中流階級を対象としなかつた点を批判しており、ベルラーへはこの評価に関して共感を示していたのであった。

結章

個人主義の否定に始まり、やがて工業化の受容に至つたというベルラーへの思想の変遷において、中世建築への注目があつたことが改めて確認された。中世における共同体の芸術という建築の在り方とその成立プロセスを評価し、それらを近代において標準化・規格化という方法に読み替えることで、建築が20世紀において再び「共同体の芸術」となることができるという可能性をベルラーへが志向していたことが、本研究の考察から明らかとなった。

■注釈

- ¹ S.ギーディオン：『空間 時間 建築』、太田寛訳、丸善株式会社、1955、p.377。ギーディオンは「(ベルラーへが)ロマネスクの建築の研究から導き出した新しい目標(括弧内筆者)」が重要であると述べている。「ロマネスクの方法が彼ら(ベルラーへとリチャードソンを指す)をして、彼ら自身の時代が待ち受けていた新しい形態に向う道筋に出立させることになったのである(括弧内筆者)」という指摘は非常に示唆的であると考えられる。
- ² 宇田直史：「H.P.ベルラーへの言説にみる「普遍性」の理念を軸とした思想の展開」、『日本建築学会計画系論文集』、第75巻、第662号、2010/6、pp.1605-1614。
- ³ I.B.Whyte and W.de Wit: *Hendrik Petrus BERLAGE: THOUGHTS ON STYLE 1886-1909*, 1995, p.187, p.189.
- ⁴ “sachlich”は「即物的な」「客観的な」「実際のな」「まっすぐな」「公平な」など様々な訳し方ができる多義的な語であるため、本研究ではあえて日本語に訳さず原語を使用している。
- ⁵ I.B.Whyte and W.de Wit: *Ibid.*, p.195. ⁶ *Ibid.*, p.239.
- ⁷ ドナルド・I・グリーンバーグ：『オランダの都市と集住 多様性の中の統一』、矢代真己訳、住まいの図書館出版局、1990、p.36.
- ⁸ 同上書、p.38.
- ⁹ Berlage: “Baukunst und Kleinkunst”, *Kunstgewerbeblatt* 18, 1906,p.241

■図版出典

図1 I.B.Whyte and W.de Wit: *Hendrik Petrus BERLAGE: THOUGHTS ON STYLE 1886-1909*, 1995, (ii)

(本田研究室)